

小説『ジョウゼフ・アンドルーズ』の本質

児 玉 啓 介

1. 小説とその構成

『ジョウゼフ・アンドルーズ』という小説はヘンリー・フィールディング (1707~54) によって1742年に書かれたもので、その2年前、1740年サミュエル・リチャードソン (1689~84) によって書かれた『パメラ』の人気の反発し触発されて書かれたものであった。

この小説の題名は次の通りである。

The History of the Adventures of Joseph Andrews, and of his Friend Mr. Abraham Adams. Written in Imitation of the Manner of Cervantes, Author of Don Quixote. 『ジョウゼフ・アンドルーズとその友人エイブラハム・アダムズ氏との冒険物語。ドン・キホーテの作者セルヴァンテスの手法にならって書かれたもの』

小説と言えば“novel”という英語を思い出すが、フィールディングの場合はそれではなく、“history”であり、作者自身は“biography” (伝記) という意識が強く、自分では“novelist”という意識はなく、“biographer” (伝記作者) と言っている。それにもかかわらず、後世の人々が彼の作品を『物語』(history) としてではなく、『小説』(novel) として扱っている理由がよくわからないが、この論文では通説に従って『小説』と呼ぶことにする。

小説『ジョウゼフ・アンドルーズ』は全部で4巻64章から成っているが、第1巻は18章から、第2巻は17章から、第3巻は13章から、第4巻は16章から成っている。主人公ジョウゼフが全然登場しないのが14章で、各章の前かうしろにちょっとだけ話題になるのが7章で、全体的に見ると、小説の約3割が主人公について話題にならない部分と言っている。

2. 作者の意図

フィールディングは序文の中で次のように言っている。

「人生は至る所で正確な観察者にばかばかしいことを提供してくれる」

「ぞっとするようなことは記述するよりも絵の具で画く方がずっと簡単であるが、ばかばかしいことは絵の具で画くより記述する方がずっと簡単である」

「ばかばかしいことだけがこの作品における私の領域である」

「本当にばかばかしいことの唯一の源は気取りである」

「気取りはふたつの原因即ち虚栄か偽善のいずれかから生じる」

「虚栄から生じる気取りの方が偽善から生じる気取りよりも真理に近い」

「気取りはばかばかしいことの唯一の真実の源であるように私には思われる」

なおフィールディングは3巻1章で記述の意図について次のように断言している。

「私は人物でなくて態度を、個人でなくて種類を記述している」

3. 登場人物

ジョウゼフ・アンドルーズ：ブービー夫人の召使

ブービー夫人：ジョウゼフの女主人でトマス・ブービー卿の未亡人

パメラ・アンドルーズ（のちのブービー夫人）：ジョウゼフの仮の姉

エイブラハム・アダムズ氏：妻と6人の子供をもつ貧しい牧師

スリップスロップ夫人：ブービー夫人の女中

ピーター・パウンス氏：ブービー夫人の執事

ベティ：ブービー夫人の客室係

ブービー氏：ブービー夫人のおい

ギャファー・アンドルーズとギャマー・アンドルーズ：パメラの父と母

ファニー・グッドウィル：パメラの実の妹でジョウゼフの婚約者

ウィルソン氏：ジョウゼフ・アンドルーズの実父

ハリエット・ハーティ：のちのウィルソン夫人

バーナバス氏：牧師

トラリバー氏：豚を飼っている牧師

トラリバー夫人：彼の妻

トウワウス氏：宿屋の主人

トウワウス夫人：彼の妻

ジョン：馬丁

ベティ：その宿屋の客室係

トム・サックブライブ：巡査

トム・ウィップウェル：御者

グレイブエアズ嬢：馬車の乗客

スカウト氏：弁護士

ティトル夫人

タトル夫人

夫人の付添いのディダッパー

行商人

以下馬車の乗客の話に出てくる人物

レオノーラ：浮気女

ホレイショー：彼女の恋人

ベラーミン：彼女の付添い

フロレラとリンダミラ：彼女の友人

以上登場人物は固有名詞をもっている人物32人、固有名詞のない行商人で、合計33人になるが、その他少年、青年、馬丁、紳士、淑女など大勢登場する。

以下主な登場人物の特徴または態度を紹介する。

(1) エイブラハム・アダムズ牧師^(注1)

彼は優秀な学徒であり、ギリシャ語・ラテン語を完全に使いこなし、更に東洋諸国語の知識が広く、フランス・イタリー・スペインの各国語を読んで翻訳することができる。長年にわたって猛烈に勉強したために大学でもめったに見かけないほどの学問の持ち主である。更に彼は良識の徒であり、有能の士であり、気立てのよい人物であるが、同時におきな子のようにこの世の習わしに全く無知である。人をだます意図は全然ないし、そんな企みを考えたこともない。ものごとくに寛大で、友情に厚く、勇敢すぎるところがあるが、単純・素朴が彼の特徴である（1巻3章）。忘れっぽいところがちょっとあり（2巻3章）、「私の良心が純粹である限り、人が私にどんなことをしても決して恐れない（4巻2章）」と言うほど勇気があり、悩んでいるジョウゼフに向って、どうしてもしあわせを期待するなら、いろいろな感情（喜怒哀楽）に負けてはいけないと忠告すると、逆にジョウゼフに、忠告を受けるより忠告をする方が簡単だとやりこめられる場面がある（4巻8章）。もうひとつ彼の人格を表わす言葉に「教会でサープリス（短白衣）を着ているアダムズ氏とほかの場所でサープリスを着ていないアダムズ氏は全く別人である」（4巻16章）というのがある。

(2) ブービー夫人

夫人の夫が死んで4日目、夫人は機会を見てジョウゼフに言いよるが、彼に気分を害されて、とうとう彼をくびにになってしまう（1巻9章）。夫人はジョウゼフを追い出したことで、彼の姿が消えるとともに怒りも消えるが、逆に彼に対する恋しさが、彼の面影とともに、心に深く残ることになる。夫人は久しぶりにロンドンから郷里のサマーセットシアの自宅に帰るが、たまたま近くでジョウゼフの姿を見かける。そのために自分の軽率だった気持ちを呪い、怒りがこみあげてきて、遂に激しい感情になるが、彼を呼びもどそうと考えても、彼女の自尊心がそれを許さない。軽蔑、憎しみ、不安が入り乱れ、復讐の気持ちが起るが、彼を追い出した時の様子を思い出して、みじめな気持ちになり、怒りと上機嫌と軽蔑の入りまじった笑顔を浮かべて彼を眺めることになる（4巻1章）。夫人の性格をもっと簡単に紹介すると、彼は同じ人間を発作的に恋したり、発作的に憎んだり、発作的に憐れんだり、発作的に軽蔑したり、発作的に賞讃したり、発作的に見くびったりするが、それが短時間に変って行くというものである（4巻4章）。

(3) スリップスロップ夫人

彼女自身は牧師の娘であり、アダムズ氏に対してある程度の尊敬の念をもち、彼の学問には大いに敬意を表し、神学の諸問題でしばしば彼と議論し、理解があることを表わす。というのは彼女はしばしばロンドンにいたことがあるし、田舎牧師が知ったかぶりをする以上に世間のことを

(注1) 「牧師」にあたる英語は3種類 'curate' 'clergyman' 'parson' が使われる。

知っているからである。彼女はアダムズ氏と議論をする際に特に有利になる。というのは彼女は難しい言葉を気取って使うのが非常に上手で、牧師自身彼女の意味がわからなくなることがあるからである（1巻3章）。彼女は年齢は45歳ぐらいで、若い頃ちょっとした失敗があったが、その後立派な女中として過ごしている。この頃目立って美しいというわけではないが、背が低く、体はでぶでぶ太っていて、顔はにきびのあとがあってやや赤味をおび、鼻は大きすぎるぐらい、眼は小さすぎるぐらいで、息は牛には似ていないが、乳房は大きく、足の一方がちょっと短いので、歩く時ちょっと不自由である（1巻6章）。この女性を作者フィールディングは美しい女性（fair creature）と描写しているのだが……。

(4) ウィルソン氏

彼は良家の出で、紳士として生まれ、パブリック・スクールで自由な教育を受け、ラテン語、ギリシャ語を得意とする。彼が16歳の時、父が沢山の財産を残して死ぬ。17歳の時ロンドンに出るが、立派な紳士になるのが目的であった。まず、身につける装飾品に関心を持ち、次にいろいろな資格、即ち、ダンス、フェンシング、乗馬、音楽に関心をもつ。紳士になるもうひとつの条件として、町（ロンドン）を知ることだと考えて公の場所に出入りするようになり、数人の女性とつき合う。何がもとでこのような愚かな生活をするかという、虚栄心のもとだという。このような生活を2年したあと、寺院に退くが、そこに出入りする連中は気取りの典型で、彼らの虚栄心はなお一層ひどいと知る。その後4人の女性と個人的に親しくなるが、結局彼女たちと手を切ることになる。それから、真理を探究し、人間の理性によって自制し、宇宙に神が存在するという教義は偽りと考え、正義こそが道德の究極の純粋に到達すると考える愉快な連中の仲間入りをするが、長つづきせず、結局、芝居や詩を書こうとする。これもあまりかんばしくなく、たまたま知り合った本屋に資金を出してもらってようやく生活する。この時の資金の一部で買っていた宝くじが縁となって、昔の知人の娘から200ポンド同封した手紙をもらう。これがもとで彼女と結婚し、3人の子供をもうけて田舎に引きこんで、そこで20年間生活する（3巻3章）。

(5) ジョウゼフ・アンドルーズ

10歳の時、父方のブービー氏の伯父であるトマス・ブービー卿のところに奉公に出されるが、この頃までに読み書きの教育はすんでいた。最初は鳥の世話係り、次は猟犬の指揮係り、次は馬の係りになる。この係りの時、年に似あわず力強さと機敏さと大胆さを表わし、トマス卿のためによく競馬に出て、その技量を発揮し優勝をする。このようなことがあってジョウゼフが17歳の頃ブービー夫人の眼にとまり、夫人の付き添いをするようになる。使い走りをしたり、身の回りの世話をしたり、夫人が教会へ行く時は祈祷書をもっていったりするが、教会では聖歌を歌ってそのすばらしさが目立つので、牧師のエイブラハム・アダムズ氏の目にとまることになる（1巻2章）。21歳になったジョウゼフは中背では高い方で、両手は優美で力強さを表わし、両足両太股はなんともいえない釣合いを保ち、両肩は幅広く筋骨りゅうりゅうとしていて、両腕はこれからも力強くなりそうである。髪は栗色で、背中のところまで巻毛になっており、額は広く、眼は黒く、燃えるような優しさに満ちており、鼻はややローマ系で、歯は白く歯並びはよく、唇は引きしま

って赤く柔く、ひげはあごと鼻のところがちょっと粗く、頬は血色がよく濃いうぶ毛でおおわれ、容貌はえも言われぬ感受性と共に思いやりを表わしている。これに加えて、衣服は完璧で非のうちどころがなく、多くの貴族を見たことのない人にはこれこそ貴族という印象を与える態度である（1巻8章）。草原でアダムズ氏が数匹の獵犬に襲われているのを見て、彼を助けに走って行く時のジョウゼフの心意気は友情、勇気、若さ、美しさ、力強さ、すばやさを伴うものであるが、この様子を一言で表わす直喩がどうしても見つからないと作者は言う（3巻6章）。久しぶりにジョウゼフが姉のパメラに会う時の様子は生き生きとした色鮮やかさを表わすが、それは自然が与えた健康と力強さと美しさと若さを同時に表わすものである（4巻6章）。

(6) ファニー・グッドウィル

19歳で背が高く姿が美しく、まるまると太っていても体が引きしまっていて、特に胸のふくらみは美しい。ヒップはフープを入れる必要はない。両腕は仕事をしたために少し赤みをおびているが、首の白さはたとえようもない。髪は栗色で生まれつきふさふさしているが、それをカットして、日曜日などには現代風に首のあたりでカールしている。額は広く、眉毛は丸く、眼は黒色で輝いていて、鼻は丁度ローマ系で、唇は赤く潤いがあり、下唇がつき出している。歯は白いが歯並びがいいわけではない。あごのところに天然痘のあとがあり、大きいのでえくぼと間違うぐらいである。顔色は美しく、ちょっと日焼けしているが、花のように美しいので、顔に自信のある淑女たちでもうらやましがるぐらいである。更に加えて、ものすごいはいかみやであるが、容貌には信じられないぐらいの感受性が見え、微笑む時の優しさは真似もできないし書き現わすこともできない。要するに、彼女には生まれつきの上品さがあり、美顔術など及びもつかず、見る者みんなをびっくりさせる上品さ、一言で言えば、愛らしい女性である（2巻12章）。アダムズ氏にとっては、一番気立てが優しく、一番正直で、一番立派な女性であるし、やきもちやきのブービー夫人でさえ、ファニーは教区一番の美人と認めざるを得ない女性である（4巻2章）。ジョウゼフとの結婚式の時の彼女の気取らない異常なぐらいのしとやかさほど目立つものはないし、ウェディングドレスを脱いでも、もともと彼女の魅力はすべて自然の贈物だし、若さと健康と花のような美しさと清潔さと純粹無垢が非のうちどころのない一枚の絵画を作り出している（4巻14章）。ただひとつ彼女の欠点は、いや、長所は読み書きができないので、手紙を書く場合、代筆にたのんでも彼女の優しい純真な気持ちの微妙なところまで相手に伝えることができないことである（1巻11章）。

(7) バーナバス氏

ジョウゼフが強盗に襲われて怪我をし、無一文の状態でいるところを通りがかりの馬車に乗せてもらって、近くの宿屋に着いて、外科医に診断し治療してもらったが、医者診断では彼の命が危いので、教区の牧師を呼んで、あの世に行く準備をした方がよいということになり、牧師が呼ばれて次のように牧師とジョウゼフの対話が行なわれる。「強盗を赦せますか」「そんなことはできないのじゃないかと思えます。彼らがつかまると聞けばこんなに嬉しいことはありません」「それは正義の問題です」「そうです、もし私がまた彼らに出会ったら、攻撃してできれば

殺してやりたいぐらいです」「なるほど、強盗を殺すことは法にかなっていますが、キリスト教徒のように彼らを赦すことができますか」「その赦すというのはどういうことですか」「それはこのように、あのう、ええと、赦すことですよ、要するに、キリスト教徒のように赦すことです」「それじゃ、できるだけ赦すことにします」「それ、それ、それがいい」(1巻13章)。

(8) スカウト氏

彼は法律のどんな知識もなく、弁護士としての教育を受けないで、法令に反対し、地方で弁護士として活動することを引き受け、弁護士として実際に呼ばれているそんな連中の一人であり、社会の害虫である(4巻4章)。

(9) レオノーラ

彼女は財産家の娘で、背が高く姿形がよく、容貌は陽気にあふれ人を引きつけ、この種の美人は人を誘惑するのに劣らぬぐらいだますところがあり、上機嫌はしばしば気立てのよさと誤解され、活発は真の理解力と誤解される。現在18歳で、イギリスの北部の町におぼと一緒に暮らしている。極度に派手好みで、舞踏会その他公の会合に欠席したことがなく、機会あるごとに貪欲な虚栄心を満足させ、出席している女性よりも男性に好まれるそんな女である(2巻4章)。

4. 語または文の紹介

(1) 虚栄

人間の気取りの原因のひとつは虚栄であるというのが作者の考えであるが、その虚栄を擬人化して、次のように言う。

おお虚栄よ、汝の力はなんと認識されていないことか、汝の作用はなんと識別されていないことか。汝はいろいろ変装して人間をどんな気まぐれにだますことか。ある時は憐れみの顔を装い、ある時は寛大の顔を装い、否、汝は英雄の美德にのみ属するあの栄光の装飾品を身につけることさえ確信している。汝憎むべき醜い怪物よ。汝を牧師はののしり、哲学者は軽蔑し、詩人はばかにする。汝を公然と知人として認めるほどの恥しらずがいるか。汝をこっそりと楽しもうとしないものがいかに少ないか。否、大抵の人が生涯を通じて追求しているのが汝である。汝を喜ばすために最大の悪事が日行なわれ、一番下品な泥棒も一番偉大な英雄も汝の注目の的にならないことがない。汝の愛撫はしばしば個人的強盗と略奪された地域の唯一の目的であり唯一の報酬である。われわれが望まないことを他人から引き出そうとし、彼らがすることを彼らに押しつけようとするのは、汝売春婦よ、汝の欲望をみたすためである。われわれの喜怒哀楽はすべて汝の奴隷である。貧欲そのものがしばしば汝の女中にすぎないし、色情さえも汝の手先である。弱い者いじめの恐怖は群衆のように汝の前を飛び、喜びと悲しみは汝の面前で頭を隠す。私は汝をののしりながら、汝に言い寄っていると汝が思い、汝の愛が私を鼓舞して汝に関するこの皮肉な賞讃の言葉を書かしていると汝が思っていることを私は知っている。しかし汝はだまされている。私は汝をこれっぽっちも尊敬していない(1巻15章)。

(2) 人間の最大のしあわせは希望にある

この文章はホレイショウからレオノーラ宛の手紙の中に出てくる文である。「人間の最大のしあわせは希望にあるという一般の主張の偽りを私が経験するあの祝福された日の到来をどんなに熱心に期待しているかをあなたに言えるだろうか」(2巻4章)(下線は筆者)

(3) 絶望は罪深い

紳士のウィルソンがアダムズに身の上話をしている場面で、ウィルソンの芝居の脚本がつき返されたのを怒って、自分の部屋に引きこもって、そこで絶望してベッドに身を投げ出したと言った時、アダムズが次のように言う。「あなたはひざまづいて身を投げ出すべきだったんです。絶望は罪深いですから」(3巻3章)。

次はジョウゼフとアダムズとの対話の中でアダムズは次のように言う。「どんな事件がわれわれに迫って来ても、われわれは絶望すべきではないし、どんな事件が襲って来ても、悲しむべきではない。われわれはすべてのものごとにおいて、神の意志に服従しなければならない」(4巻8章)。

(4) 死はすべての人に共通している

ウィルソンがアダムズに身の上話をしている場面で、ウィルソンが長男を無くしたと言って嘆く時、アダムズが言う。「われわれは神に服従しなければならないし、死はすべての人に共通していると考えなければならない」(3巻3章)。(下線は筆者)

(5) 神はすべてのものごとを一番よく配置する。

ウィルソンがアダムズに身の上話をしている場面で、ウィルソンが無くした長男の身の上を案じている時、アダムズは言う。「神はすべてのものごとを一番よく配置します。だから恐らく息子さんは偉人になっているかも知れませんが、公爵になっているかも知れませんが、いつかまた帰ってくるかも知れませんが」(3巻4章)。

(6) パブリック・スクールは悪徳と不道德の温床である

アダムズとジョウゼフが道路を歩いて旅をしている時、アダムズがジョウゼフに向ってした話。「パブリック・スクールはありとあらゆる悪徳と不道德の温床なんだ。私が大学で覚えている悪い連中はみんなパブリック・スクールで教育を受けた。そうだ、ほんの昨日のここのように覚えている。奴らは自分たちのことを王様の生徒と呼んでいた。理由は忘れたけど、ずいぶん悪い奴らだった。ジョウゼフ、おまえはパブリック・スクールで教育を受けなかったことを神に感謝していい。今のような美德は身につけなかったかも知れない。私がいつも気にしているのは男子の道德だ。男子は無神論者や長老教会派よりあほうの方がいい。不道德の魂に比べると世間の学問は一体何だ。大人は魂の代りに何をとりのだろうか。それにしても立派な学校の先生たちはこんなことは全然心配していない。私は大学に行っている18歳の青年を知っているが、彼は教義問答が言えない。だから私の立場上彼が言いまちがえたらすぐいつも叱ってやった。いいかい、あの紳士(ウィルソン)の不運もことごとくパブリック・スクールで教育を受けたために起ったことなんだ」(3巻5章)。

(7) 誰もよいことをめったにしない

ジョウゼフとファニーとの対話の中で彼が次のように言う。「誰もよいことをめったにしない

けど、人は皆よいことをする人を一致してほめます。実際、人は皆善を推薦するのに同意しても、誰もその推薦に価するように努力しないのは不思議です。一方逆に人は皆悪を非難し、非難するものにしきりになりたがっています」(3巻6章)。

(8) 富(財宝)について

アダムズとジョウゼフが泊っている宿屋の暖炉のそばでたばこを吸っている旅行者で威厳のある人(実はあとでわかるがローマ教会の牧師)が次のように話しかける。「一般的に人間が富におく価値を考える時、あなたと同様に私もしばしば驚いたことがあります。というのは富の力はどんなに小さいかを毎日の経験が私たちに教えてくれるからです。そしてまた富は私たちにどんな本当に望ましいものを与えてくれるかと考えるからです。身障者に美しさを、弱い人に力を、虚弱な人に健康を与えることができますか。たしかにもしできれば、偉い人々の会合によく出入りするあんなに沢山の不器量な顔は見ないでしょうし、あんなに沢山の虚弱な人々が馬車や宮殿の中で悩み暮らしはしないでしょう。いや、王国のどんな富もあの若い乙女の花のような美しさの中で青ざめた醜さを飾るための化粧品を買うことはできませんし、あの青年の力強さで病気を装う薬を買うことはできません。富は私たちに休息の代りに不安を、愛情の代りに拓みを、安全の代りに危険を持って来ませんか。富はそれ自身の所有を長びかせたり、富を楽しむ人々の毎日を長くしたりすることができますか。他にもいろいろありますが、富に伴う怠け、ぜいたく、心配は何百万人の命を短くし、苦痛と悲惨を伴って時ならぬ墓場へと連れ去ります。私たちの体を美しく飾ることができなかつたり、強くすることができなかつたり、生活を楽しくしたり寿命を長びかせたりすることができないなら、その価値はどこにありますか。そしてまた、体以上に心を飾ることができますか。富は心を虚栄によって大きくしませんか。自尊心によって頬をふくらませませんか。美德のあらゆる呼びかけに耳をとざしたり、同情のあらゆる動機に本心をとざしたりしませんか」(3巻8章)。ピーター・パウンスとの対話の中で、アダムズは言う。「慈善を伴わない富は全然価値がありません。というのは富はそれを他人への祝福にする人にとってのみ祝福だからです」(3巻13章)。

(9) どんな事件も神の許しなしに起らない

ジョウゼフとの対話の中でアダムズは言う。「お前はキリスト教徒だということ、そしてどんな事件も神の許しなしに起らないし、服従することが人間の、ましてやキリスト教徒の、義務であることを考えなさい。われわれは自分自身を作ったのではなく、われわれを作った同じ力がわれわれを支配し、われわれは絶対に神の意のままである。神は自分の好きなことをわれわれと一緒にするかも知れないし、われわれは不平を言う権利を持っていないということなどを考えなさい」(3巻11章)。

(10) 無知は2重である

上記と同じ場面で、「お前は人間であり、結果的につみびとであり、このことがお前の罪に対する罪であるかも知れないし、実際にこの意味で罰は善として、更に最高善として、見なされるかも知れない。というのは善は天の怒りを満足させ、われわれの破滅の原因なしに続かないあの

激怒を防ぐからである」(3巻11章)。

5. 小説のあらすじと解釈

ジョウゼフ・アンドルーズは10歳でトマス・ブービー家に奉公に出されるが、主人の死後ほんのちょっとしたことでブービー夫人の怒りにふれて、ブービー家を追い出されてしまう。ジョウゼフは古里へいったん帰ろうとするが、気がかわり、恋人のファニーに会うために旅をつづける。途中で偶然牧師のアダムズとファニーに出会う。道中さらにいろいろな宿屋でそれこそばかばかしい事件が起るが、ある時紳士のウィルソンの話で彼の息子が赤ん坊の頃盗まれていまだに行方がわからないと言う。更にジョウゼフの母の話で、ファニーが赤ん坊の頃家にたずねて来たジプシーの女たちに応待しているすきに、ジプシーの男の子とファニーが取りかえられてしまう。母は男の子にジョウゼフという名前をつけて自分の子として育てる。結局ジョウゼフはウィルソンの息子で、ファニーはアンドルーズ家の娘だとわかり、アダムズの仲人により教会でめでたく結婚式をあげ、そのごふたりは田舎でしあわせに暮らすといういわゆる「ハッピー・エンディング」の話である。

さて、作者フィールディングは前述のように「気取り」「虚栄」「偽善」を描写し、「人物でなく態度を、個人でなく種類を記述し」、「ばかばかしいことだけがこの作品における私の領域である」と言うが、登場人物を見たり、彼の主張を聞いたりすると、はたしてその通りであるだろうか。登場人物のうち代表的なものをすでに9人紹介したが、ふたり即ちジョウゼフとファニーを除いて、なるほど、気取り・虚栄・偽善はあてはまるが、ジョウゼフとファニーにこれらの性格があてはまるだろうか。人物とか個人でなくて態度とか種類を記述すると言うが、彼の主張通りに両者を明確に区別して書けるものだろうか。人物や個人の特徴を詳細に書くことによって、個人は勿論のこと彼に共通するもの、即ち、例えば、牧師という人物、牧師という職業の通有性を描写できるのではないだろうか。作者はこの作品においてばかばかしいことだけを書いているようなことを言うものの、前述の「語または文の紹介」でもわかるように、その内容がばかばかしいどころか非常に真面目で真剣なことを書いていると私は思う。それでもこれらを作者はばかばかしいことだと言うのだろうか。

さて、ジョウゼフとファニーに話題をもどすが、このふたりには気取りも虚栄も偽善もないと私は思う。作者はこれらの性格をもった人物を描きたいと言いながら、その通りに描いていないところにこの作品の意味がある。人生の正確な観察者である作者にとってこの世はばかばかしいことばかりであろう。だから牧師のアダムズやレディーのブービーを書いた。はたしてジョウゼフとファニーは現実に存在する人物であろうか。たとえ存在するとしてもごくまれであろう。このふたりはまだ若い。ふたりが成長してアダムズやブービーの年齢になった時、現在もっている純粹・純真・清潔・無垢などを依然として維持できるだろうか。通俗的には恐らく不可能であろう。それこそ泥にまみれた人生を送るかも知れない。だから作者はこのふたりに今のような純粹さを生涯持ち続けてほしいという願いを持っているのかも知れない。地位や名誉や富だけを追い

求める鼻持ちならぬ俗物になってほしくないという願いがあるのだろう。フィールディングがこの作品を書きおえるまでリチャードソンの『パメラ』に対する反発を意識的に持ち続けていたかどうかはわからないが、作者は生来正義感の強い、不正を憎む人物であったようである。それでこそ法律家にもなってその方面の活動をしたのであり、その性格がこの小説を書く場合にも表われているようである。即ち小説家フィールディングだけでなく、法律家フィールディングが作品の底流にあると思う。いずれにしても、ジョウゼフもファニーも作者の理想像であることは言うまでもない。

(平成2年9月17日受理)